

声楽

アグネス・バルツァ
「オペラ・アリアを歌う」

東京・ニューシティ管第22回定期演奏会で、メゾのアグネス・バルツァが8曲のアリアを歌うのを聴き、改めてその力に感じ入った。とにかく第一曲「ロッシニー」(アルジェのイタリア女)からの「むごい運命よ」で、アッと言う間に逆境に立ち向かう勝ち気なイタリア娘イザベッラが舞台に出現。声の輝き、歌の造形、野性的な姿。特に集中力の凄さは、短距離選手のスタート・ダッシュと同じで、徐々に声が出てくる通常の歌手とは全く違う。そして8曲8役、シヤルロット、カルメン、サントウツァアと、どれも彫りの深いメゾの役を、ドラマと情景、愛と悲しみと、それぞれの役になりきって訴えてくれた。たとえば休憩後の「トン・カルク」(エポリ公女「ヴェールの歌」)では、押し殺した弱音を激しい狂乱

を自在に駆使、艶やかさと浮淫さを示し、次のベルリーニ「カブレーナイとモンテッキ」では一転して清純なロメオのアリア、最後の「カヴァリア」からの「ママも知るとおり」では、サントウツァアの悲痛な訴えが背後にある南欧の場とともに伝わってくる。3曲のアンコールでは「モキティリヤ」の凄め、「私のお父さん」での他の歌手とは全く違う必死な訴えが何とも素晴らしい。
9月25日・東京芸術劇場 ●三番清運